

多様性のあるマレーシア社会から学ぶ —アイデンティティ形成に着目して—

安蒜ひなた (茨城大学教職大学院2年次)

1. 問題の所在及び目的

現代社会では、様々な国籍や文化的背景をもつ人々が共存する社会が当たり前となってきており、マレー・中華・インド系をはじめとする多様な民族¹が共存しているマレーシアもその一つである。マレーシア政府の発表によると、2015年時点でマレーシアの人口のうち、ブミプトラ²は61.8%、中華系は21.4%、インド系は6.4%、その他0.9%、マレーシア国籍ではない者9.6%であった。マレーシアは1963年に独立して以降、経済的な不平等を防ぐために、マレー人優遇政策が取り入れられ、1971年に新経済政策 (New Economic Policy: NEP) が発表されたことでマレー人優遇政策がより体系化された。このようなマレーシアの状況を畝川 (2016)は、「マレーシアの社会文化政策は、同化主義の考えに基づくマレー人による社会的・文化的支配 (マレー中心主義) と多文化主義の考えに基づく非マレー人の社会的・文化的権利の承認の両方が並存するあいまいな性質を持つものとなっている (p. 34)」と指摘した。さらに、マレー人優遇政策は、他の人種の文化をマレー文化に同化させる性質があると言い、マイノリティの人種である中華系の間では、文化の継承への懸念や、国からの差別を受けているという認識が広まったと記されていた。原 (2000)は、1991年のマレーシアを一つの民族として統合しようという「マレーシア民族創出構想」を提唱した Wawasan2020 構想について触れていた。この構想が発表された状況下において、マイノリティの人種である中華系の間での議論として、野党の中華系が同化や画一化を懸念していたと述べ、マレーシア民族創出構想は文化や言語の差

異を消し、同化を強制することと同じ意味なのではないかと指摘をされていたと記した。以上のことから分かるように、マレーシアでは多民族が一見共存しているように見えるが、実際には、それぞれの民族の文化の在り方やアイデンティティをはじめとする葛藤や対立が大きな課題となっていることが伺える。そして、このような社会的状況は、集団のアイデンティティ形成だけではなく、個人のアイデンティティ形成にも複雑に絡み合うことは容易に想定される。

そこで本研究では、多様性のあるマレーシア社会の中で、現地の人々がどのようなアイデンティティ形成の過程を辿り、どのように自身を確立していくのかということ明らかにすることを目的とする。

2. 研究の方法

2024年1月4日～1月15日の12日間マレーシアへ渡航し、主な構成人種であるブミプトラ・中華系・インド系を対象にインタビュー調査を行った。質問項目は茨城大学研究倫理審査を受けた (承認番号: 23P1500)。渡航前には、質問内容がアイデンティティ形成を聞き出すのに十分であるかどうかを検証するため、日本に滞在しているマレーシア人2名にパイロットスタディを行い、質問内容の再検討を行った。

インタビューは1人1時間程度の半構造化形式で、英語で行った。インタビュー項目としては、「あなたが生まれてから今まで住んでいた場所について教えてください。また、移動をした経験がある場合には、それらについても教えてください。」という移動の経緯を聞くものから、

¹ マレーシア人自身が「race」という言葉で語っていたため、実際のインタビューでは「民族」ではなく、

「人種」という記載で統一している。

² マレー系とマレーシアの先住民を指す言葉

「友達と同じ人種の人が多かったですか。」や「自身の人種を意識したことはありますか。」、「あなた自身に対しての差別的な経験や感情を感じたことがありますか。」などの項目も設けた。インタビューの回答は、AIを用いて音声から文字起こしをした後、自身で体裁を整え、さらに、英語から日本語に翻訳したものを作成した。そして、それぞれがどのような背景をもち、どのような要素がアイデンティティ形成に関わっているのかという観点から、共通している部分を探すとこの形で分析を行った。

このインタビューは計11名のマレーシア人に行ったが、そのうち1名は、インタビュー中に部屋に人が入り込み、他の研究協力者と条件がそろっていないということで使用しないこととした。さらに、うち3名は、インタビューデータを分析したところ、他人種との関わりを積極的にする傾向があり、人種間での問題についてもオープンに議論できるような環境で育った者だった。彼らのストーリーからは、アイデンティティクライシスが無かったと判断したため、データとして使用しないこととした。

3. 結果

3-1 「努力は裏切らない」という経験(C・インド系)

Cさんはインド系マレーシア人であり、クリンという場所で生まれ、小学校に上がってすぐに親の仕事の関係で現在も住んでいるペナン島にきたという経緯を持っていた。

貧しい家庭で育ち、両親が政府の援助に頼りながら生活してきた姿を見てきた。人種の話をしたことがあるか否かについての話の中でも、「親は政府に頼りがちであるから人種の話、つまり政治の話を多くするが、自分はそのような話には関係ないと感じている」と言い、「自力で生きていくことが難しい人が人種の話をしている」とも述べていた。人種の優遇政策について尋ねると、「人生は平等ではないから仕方ない」といい、「やるしかない」のだと語った。他にも、他人種との関わりのお話では人々に適応

(adapt)しようとするCさんの姿もあった。Cさんは幼いころから物静かで、物事を観察することが好きだったといい、異なる人種の友達の家に行ったときには、その人達に敬意を払うため、そして攻撃的(offensive)にならないように、常にタブーなことを把握し、相手の文化に沿って行動しよう意識していた。加えて、クラスみんながサッカーをやるという理由で、好きでもないサッカーに仕方なく参加していたという話もしていた。このような環境下で、努力をした分だけ自分の道を開いていけることを経験した。

以上のことから、Cさんは親の姿を見たり、多数派に適応しなくてはならないような環境に置かれたことで、マイノリティという厳しい立場であることを十分に理解し、受け入れているということができる。その上で、努力をした分だけ自分の道を開いていけることを経験し、自分らしく生き抜いていく方法を確立したのではないだろうか。

3-2 二つの顔とジレンマ(D・中華系)

Dさんは中華系とイバン(ブミプトラ)のミックスであった。ボルネオ島のサラワで生まれ、大学入試準備校に行く際に、ジョホールバルへ移動した。その後、大学進学の際にペナン島にきたという経緯をもっていた。

Dさんの特徴は、人種は中華系であるが、自己の意識はイバンに近かった。なぜなら、イバンやマレー系などのブミプトラと呼ばれる人々の共通点として人を想いやる「マナー」の在り方が大きく影響しており、この共通理解を持ったブミプトラと一緒にいることが多かったという発言からも分かる。自身の人種でもある中華に関しては、「言語的にもあまり話せないため、中華系の人と関わる時には内向的になる」と言っていた。一方で、自身の紹介をするときには「純粋な中華系ではない(I am not pure Chinese)」と説明するという。その理由として、ミックスであることを誇りに思っているからだと述べていた。このように、Dさん自身、

ほとんど中華系の文化を持っていないにも関わらず、このように自己紹介する理由には、中華系が成功者としてのカテゴリーとして見られており、自分もその中にいたいと思っているという話や、人種が変えられたとしても、優遇政策は自分には必要ないと述べ、これまでの努力を示したいということが挙げられる。また、人種でグループが分かれてしまい、板挟みになった時、弱い方、学業面で考えた時の学力が低い方であるブミプトラをサポートしようという思いがあると述べたことから、中華系は強い立場であり、ブミプトラは弱い立場であるという認識が垣間見えた。

このように、文化的背景等はイバン（ブミプトラ）の方が勝っており、それらを強く自覚し始めていることが伺える一方で、複数のルーツをもつ自身に対しての誇りもあることが伺えた。これは、人種に対するイメージが影響し、努力家であり、成功を築いてきた「中華系」でもありたいと願っているDさんの心情の表れなのではないだろうか。

3 - 3 故郷にあった調和(E・ドゥスン(ブミプトラ))

Eさんは、ボルネオ島のサバという地域にあるドゥスンという民族であった。生まれてから大学入試準備校に行くまではサバで過ごし、その後、大学進学の際にペナン島に来たという経緯をもっていた。

Eさんは、西マレーシアと東マレーシアを比較しながら物事を語る傾向にあり、特に地元である東マレーシアでは調和 (harmony) があったということを誇張していた。Eさんの地元では調和 (harmony) をもって、誰もが分け隔てなく暮らしていたが、西マレーシアに来るとそれが一変し、それぞれの人種が分かれていることに衝撃を受けた。つまり、この時からEさんは人種間の関わり方について考えざるを得ない状況に置かれたということができる。しかし、Eさんは人種の問題は「気にしないようにしている」と語った。その理由として、自分には害が

無いからだという。例えば、同じ東マレーシア出身の人々がない学科において、多数を占める中華系の人々は、Eさんやマレー系と話すことができる言語を持っているにもかかわらず、同じ人種同士でしか関わろうとしない状況だったと言い、このような態度をとる人達と、Eさん自ら関わろうとは思わないと答えた。

つまり、自身のコミュニティをもち、居場所を確保した上で、Eさん自身が良しとしていた地元での人との付き合い方を、新たな環境では使わないということが分かった。また、人種間の付き合い方を考えざるを得ない状況にいるにも関わらず、「気にしないようにしている」と言ったのには、被害を被ったり、人種間の問題等に触れたりすることを避けるためだとも捉えられる。

3 - 4 マイノリティとしての自信(F・中華系)

Fさんは中華系であり、生まれてから大学入試準備校までは地元の東マレーシアで過ごし、大学進学に際して初めて移動をしたという経緯があった。

Fさんの友人はほとんどが中華系であり、「彼らは同じような心もち (mindset) をもっている」と言った。中華系のグループは一緒に過ごす相手として十分であるため、他人種との関わりを作る必要性がないと言った。また、「中華系はみんながベストを求め、同じ方向に進むことができる」と言い、それらを目指せない人達とはグループを組みたくないと言った。このように中華系の友人を信じられる理由は、大学受験をここまで乗り越えてきたからだそうだ。このような高みを目指そうとする心もちは、努力をし続けなくてはいけないという立場であることが大きいと言った。そしてFさんは昔から、良い成績が取れなかったらどうしよう、その後はどうしたらいいのかという恐怖心を抱えたり、高校の時の先生に「いいキャリアをつくるために、いい成績をとらなければいけない」という話を受け、なぜ自分達はこのように生きていくのが大変なのかと思ったりしていた。Fさんの固定

概念として、マレー系はゆっくりで中華系はハードワーカーという考えがある。このイメージが個人では異なり、グループでのイメージが全てではないと理解しつつも、固定概念が固まり切ってしまったと述べた。さらに、Fさんにとって学業はクラブ活動よりも大切であったため、他と交わるような活動には消極的であった。Fさんは、外国人がマレーシアのことをよく知らないがために、人種を気にせずマレーシア人全般のことを「マレー人」と一括りで呼ぶことに対して、やや攻撃的(offensive)に感じることもあるそうだ。また、自分のことを示すためにも人種を聞き、ラベリングをすることは普通であると述べた。

つまり、Fさんは中華系としてのアイデンティティがとても強く、中華系マレーシア人として見て欲しいという意思があると考えた。これは、マイノリティとしての努力の過程が大きく、それらによって中華系に対して強い信頼と肯定的イメージがあり、そのコミュニティの一員としての意識が強く見られた。

3 - 5 ラベリングをすることの無意味さ(I・インド系)

Iさんはインド系であり、クアラルンプールで生まれ育ち、大学進学に際して初めて親元を離れるという移動の経緯があった。

Iさんは幼いころから、人種の違いに関係なく、誰がどこに住んでいて、どの車を所有しているかということ把握するほど、近所同士の繋がりがあった環境で育った。しかし、高校に入ると人種の隔たりがあり、Iさんがこれまで慣れ親しんでいた関わり方ができなくなった環境に置かれた。そして、人生を通して多くの差別を経験し、自信がなかった頃のIさんは、差別に直面しても黙って受け入れることが多かった。Iさんが最もひどかった差別に直面した時でさえ、自分側についてくれる人は誰もおらず、声をあげようと思えなかったと言い、声をあげたところで何も変わらないと感じていたという。さらにIさんは英語を主要言語として

使い、タミル語をほとんど話さない、そして肌の色が少し明るいがゆえに「典型的なインド人」のイメージに当てはまらず、幼い時から自分がインドコミュニティに完全に受け入れられていないと感じていた。時折Iさんは、自分は「インド人として十分ではない」のかと考えることがあった。このような状況下で、例え同じインド系でも差別や排除があり、その人達も信頼ができないのが現状であると言った。しかし、他人種の自分と似た「典型的」ではない中華系の友人をもったことをきっかけに、人種を超えたつながりの価値を実感し、自分を「箱」に閉じ込めるのをやめようと思ったそうだ。同じ人種でも迎え入れてもらえないのなら、自分はどこにも属す必要がないとIさんは考えるようになっていった。そして、今では差別を受けても自信を持って意見を主張したり、他人の評価に左右されずに自分自身を表現する自信を持つことができるようになったりした。Iさん自身が経験したような不公平は、インド系マレーシア人が国で経験する差別の一例であると述べた。しかし、このような経験をしたからこそ、自身のことをマレーシア人として認識しており、インド系マレーシア人という区別を好まないと言った。

つまり、Iさんは多くの差別や偏見を受け、さらには、仲間だと思っていたインド系にさえも突き放され、自分の所属できる場所はないのかもしれないと思うほどに孤独な環境で育った。その中でラベリングをすることの意味のなさを実感し、人種にとらわれずに生きることを決めた。そして、自信をもって生きていける自分を見つけたのだ。

3 - 6 本来の所属に属しきれない自分(J・マレー系)

Jさんは、東マレーシアのサバで生まれ育ち、大学進学に際して、西マレーシアへ来たという移動の経緯があった。

Jさんは、西マレーシアに来て初めて、純粋な中華系やマレー系と出会い、人種によって分

かれて暮らしているのを目にし、地元では人種間の違いを意識することは少なく、人種によって分かれるという経験がなかったため、西マレーシアに移住してから、他人種を意識するようになった。その環境の中で、自身の人種や宗教、出身地などの所属を気にするようになるが、「自分はマレーなのに知らないことがこんなにもあるのか」と知らないことが多くあることに衝撃を受けたり、出身地について語ることが難しかったり、人種間のタブーを見分けることは難しかったり、Jさんにとって様々な葛藤や難しさがあった。さらには、サバやサラワ出身者に対する差別や偏見にも直面した。また、自身の人種や宗教が他者とどのように関わるかについて意識することがあり、自身の行動に対しての周りからの目や偏見を気にしたり、タブーに触れないようにしたり、常に気を張った状態で過ごしていた。このような状況の中で、地元のコミュニティに安心感を求めて、同じ地元の学生を歓迎するグループに参加したが、自分がそこに属していないと感じ、そのコミュニティにも完全には馴染めない感覚があったと言った。そこで、地元では人々が人種を超えて一つとなる感覚があるように、Jさん自身は西マレーシアでもオープンな心をもって、人をラベル付けすることなく、個人として接しようと意識するようになった。Jさんの中には、人種を分けるような考え方はないと感じていると語った。

つまり、Jさんは地元では人々が分け隔てなく過ごしていたにも関わらず、西マレーシアでは環境が全く異なった影響で、自身のことを考えざるを得ない状況に置かれた。そして、自分のいくつかの所属となる人種や宗教、出身地のコミュニティにも居心地の良さを感じられないという状況に追い込まれたということが出来る。そこで、地元の東マレーシアでは当たり前であった分け隔てない関わり方を取り入れることで、自分を確立しようとしていると捉えた。しかし、区別される環境にいる影響から、自分が「〇〇なのに」してはいけないことをしてい

るのではないかという葛藤を抱え続けており、常に緊張感のある中でさまよっているのがJさんの特徴であると考えた。つまり、アイデンティティが未だに定まっていないケースであるということができる。

3 - 7 努力を惜しまないコミュニティ(K・中華系)

Kさんはジョホールに生まれ、幼稚園から大学入試準備校までは地元で暮らし、大学進学に際して初めて家族を離れ、ペナンにやって来たという経緯があった。

Kさんは他人種とある程度関わりを持つことはあったが、マレー系の中には、学業と部活動との両立ができない者が多く、いい成績をとるための勉強ではなく、「不合格にならないければよい」という考え方のようにKさんには映ったといい、人種の話をするときも人種間での特権やステレオタイプについてのネガティブな話題になることが多いと述べた。また、高校生の頃、実際に他人種から無礼な態度を取られたり、からかわれたりすることがあった。これらのことから、他人種に対してよくないイメージを持っていることが伺えた。さらには、マレーシアの教育システム内で中華系やインド系の学生が直面する不公平に対して、高校生の時「なぜこんなにもフェアじゃないのか」と思っていたと言った。また、Kさんは特定の社会的状況で「中華系」として意識させられ、不利益を被った実体験もあった。このような経験をしていく中で、中華系とマレー系の間には、教育や日常生活の優先順位に関して大きな違いがあることを意識していくようになった。Kさんは、もし自分がマレー系と一緒にいたら、もう少しリラックスしていたかもしれないと言った。家族からも言われていたこととして、将来に関しては自身で責任を持ち、努力すればその分だけ、報われるのだという話があったと言った。このように次第に、中華系とその他の人種を差別化していった。そしてKさんはこれまでの関わりを通して他人種のことを十分に分かったため、それ

以上知る必要はないと言った。むしろ、Kさんは異文化間の交流において、特に外国人との友人関係に興味を持つようになった。このように、マイノリティであることで努力が他の人々より必要であったとしても、これらの努力が自立心や自分たちの道を切り拓くという価値観を強化する一因となっているとポジティブに捉えていた。さらに、Kさんは中国本土から来た中国人とマレーシアの中華系住民との間には明確な違いがあると感じており、自分は後者に属していると感じていると述べたり、必要に応じて自身の民族的背景を明確にすることで、より正確な自己紹介ができると言ったりしたことからも、中華系マレーシア人として見て欲しいという気持ちが伺える。

つまりKさんは、他人種とのある程度のかかわりを持ち、自身と他者を明確に差別化して考えていたと言うのが特徴である。それらによって、自信や誇りを持つようになり、自分自身を形成したのではないか。

4. 考察

この7人に共通して言えることは、人生を通して物事を割り切って捉えつつも、「憧れ」を持ち続けているということである(図1)。

インタビュー	割り切ったこと	憧れ
C	経済的にも立場的にも弱く、生きていくには多くの困難があるという現実	努力をすることで自身の道を切り開くことができる人
E	調和という心もちがない閉鎖的な人々	地元にもあった調和をもっている人
F	努力をする必要がない人々の在り方	努力をし続け、キャリアを築いていく在り方
I	ラベリングをする生き方	ラベリングをせず、枠組みに捕らわれない生き方
K	他人種である人々	将来を考え努力する在り方(中華系らしい姿)

図1 共通していること(対象:C・E・F・I・K)

Cさんはマイノリティのインド系であり、親の姿や学校での経験を通して、経済的にも立場的にも弱いことを実感した。これらの現実に対して、努力さえすれば報われるのだという信念をもち、現実の問題を割り切り、自分次第で道を切り開けるという心もちへの「憧れ」をもっていたと言っていることができる。Eさんは、地元にあった調和を良いものとし、それらをもち合わ

せない人々に対して割り切って付き合い合っていた。そして、例えば地元を離れていても調和をもてる人々であることに「憧れ」を抱き続けたため、それらを共通理解としている人と付き合うことを好んでいたということができる。Fさんは、マイノリティとして努力しなければならない事実を受け止め最大限努力をし、結果を築き上げてきた。そのため、その努力をする必要がない人々の在り方に対して割り切り、Fさん自身は努力をし続け、キャリアを築いていく在り方(中華系としての在り方)に「憧れ」をもっていたと考えた。そして、その姿であり続けてきたことで自信を育んでいた。Iさんは、常にマイノリティであり、かつ、同じ人種のインド系にも受け入れてもらえないことで、ラベリングをする生き方は良くないと割り切った。そして、それらにとらわれない生き方に「憧れ」をもっていたと分析した。Kさんは、マイノリティとしての不利益を被りながらも、それらを受け入れ努力してきた。そして、自身とは異なる人種とある程度関わりをもったことで、自身の在り方がより良いというように感じるようになった。そのため、他の人種に対して割り切るようになった。そして、将来を考え努力する在り方(中華系らしい姿)に「憧れ」をもつようになった。

一方で、インタビューのうち2人は、割り切って憧れを抱くも、割り切れない部分があり、まだアイデンティティの形成が定まっていないとみられる者もいた(図2)。一人目はDさん

インタビュー	割り切ったこと	憧れ
D	人を思いやるマナーを重んじることのできない人々	・成功者や努力者であること ・人を思いやるマナーを重んじる在り方
J	所属に捕らわれること	枠組みにとらわれない在り方

図2 共通していること(対象:D・J)

んである。Dさんは、人種が中華系でありつつも、人を思いやるマナーを重んじるブミプトラへの居心地の良さを見つけた。そして、それらをもち合わせない中華系とはリラックスして過ごせないDさんがいた。このような状態にも関わらず、自身を中華系ではなくブミプトラであ

ると割り切れないのには、中華系であることで成功者や努力者であるという「憧れ」もあったからだと考えた。つまり、ブミプトラの人を思いやるという人としての在り方への「憧れ」と、中華系に対する成功者であることへの「憧れ」の双方があり、割り切ってしまうことが難しく、Dさんのアイデンティティはまだ定まっていないと捉えることができるのではないだろうか。二人目はJさんである。Jさんは、地元を離れたことで自身の人種や宗教、出身地などの所属を気にし始めるようになった。しかし、それらの所属にはいきりきれない自分に気付き、所属にとらわれた生き方をしないようにと割り切ろうとした。そして、地元にあった枠組みにとらわれない在り方へ「憧れ」をもつが、未だに所属に対抗していることへの周りの目を気にしており、「憧れ」た姿になり切ることができず、迷いがまだあると分析した。

5. まとめと今後の展望

7人とも生きていく中で物事を割り切って過ごしてきた部分がある。しかし、それらと同時に「こういう人間でありたい」「こんな姿でありたい」などの「憧れ」を抱いていった。このことによって、アイデンティティクライシスを乗り越え、自分らしく生きていこうとする姿があった。

以上を踏まえて、今後の課題としては、これらを日本に住む外国にルーツをもつ子どもへの支援にどう落とし込んでいくのかという点が挙げられる。そのためには、「憧れ」を抱くことや「割

り切る」までの過程を明らかにする必要がある。それらを明らかにすることで、具体的な子ども達の支援を提案することに繋がっていくのではないだろうか。

6. 本プログラムを通して

本プログラムを通して、自身のオリジナルの研究である「外国にルーツをもつ子どもの教育課題」を、さらに深く研究できる機会をいただくことができたと感じている。マレーシアに1年間留学をした中で、マレーシアの多様性に興味をもち、日本に住む外国にルーツをもつ子どもに活かせる部分があるのではないかと思っていたが、それらを深めるような時間や機会はないものだと思い込んでいた。しかし、大学の先生からこのプログラムを紹介していただき、ぼんやりと感じていたことを明らかにする機会を得ることができた。これらによって、文献調査からいきなりフィールドワークに行くのではなく、実際に多様性のある社会で生きる人々からの意見を踏まえ、いくつかのアイデアをもらうことができた。そして、外国にルーツをもつ子どもについてより深くイメージしながらフィールドワークに取り組むことができるようになるだろう。ここで得た人々の物語は貴重な生の声であり、これらを参考にしながら、ぜひとも子ども達の支援に繋げていきたい。

参考文献

- (1) 畝川憲之(2016)「多民族国家マレーシアの国家建設 ―政府主導による国民統合の限界―」『Journal of International Studies』(1), 33-48.
- (2) 多和田裕司(2004)「「多様化」するイスラーム：現代マレーシアにおけるマレー系アイデンティティの変容」『都市文化研究』3, 84-96.
- (3) 原不二夫(2000)「マレーシア華人の見た「マレーシア民族」」『アジア経済』41(2), 52-64.
- (4) MyGovernment『Demography of Population』(<<https://www.malaysia.gov.my/portal/content/30114>>) (2024年1月17日)